開　催　報　告

比較文明学会と共催し、「共生に関する研究」の一環として、諸文明の共生に関する事例研究をテーマに掲げ「第 41 回比較文明学会大会：混迷する世界と文明の未来―長崎で考える共生」を実施した。

以下はその概要である。

今回のプログラムは、比較文明学会の学術大会との共催であるが、同時に長崎の歴史から共生の知恵を学ぶことを目指した。ウクライナへのロシアの侵略戦争以来、イスラエルのパレスチナ自治区への過激にして、苛烈な軍事侵略に表れているように、世界は共生とは逆方向に向かいつつある感があり、価値観の異なるもの同士、異質なるもの同士の共存や共生のあり方を文明レベルで研究する意義が益々高まっている。

つまり、軍事力、イデオロギー、宗教、文化など多様な形態における共生関係の構築という課題は、人類史の永遠のテーマでもあり、また普遍的に適応できる形式は、理念的には存在可能であっても現実的にその実現は困難である。しかし、この理想状態に向かい歩みを止めないことが文明の責務であろう。いわば文明の進歩派、この対立の超克を目指した人類の知恵の結晶であったからである。

今回取り上げた長崎は、切支丹弾圧や華亥異変、そして近代化前夜の動乱、そしてあの不幸な原子爆弾の被害という各種の文明レベルの断絶を乗り越えて、長崎という小さな、しかし、長崎文明と呼ぶ事が可能な独特の伝統文化を形成してきた。今回は、地域社会「共生の知恵」を長崎の歴史に学ぶことを目指した。

その様な中で、今回のテーマでの公開講演、シンポジウム、研究報告は、意義深いものとなったと考える。

2023 年 11 月 10 日（金）から 12 日（日）の 3 日間、長崎市の長崎歴史文化博物館、出島メッセ長崎という公共施設を会場に開催された。

■大会第１日目：公開企画

大会第１日目は、長崎大会の口火を切る形で、公開企画「鼎談：長崎に学ぶ　共生の歴史」を長崎歴史文化博物館の協力を得て、長崎歴史文化博物館ホールにおいて開催した。

この企画は、共生思想研究の重要性を一般の方々にも広く知っていただこうという企画で、金曜夕方 6 時からの開催ということもあり、また、長崎をテーマとしたこともあり多くの市民の皆さんの参加を得た。

鼎談は、まず緻密な現地調査を踏まえての長崎文化研究で名高い赤瀬浩先生（活水女子大学教授）の発表と、長崎を含めた大航海時代の東西貿易を専門とする島田竜登先生（東京大

学大学院准教授）の密度の濃い発表から始まった。

両先生の発表後、鼎談に保坂俊司（本学会会長）が加わり、世界的にも有数な港湾都市であり、また日本の近世を通じて日本の外交をリードしてきた長崎の比較文明学的な特長について、両先生の知見を中心に闊達な意見交換を行った。

特に、長崎という空間的には小さな港湾都市が、近世を通じて日本と世界を結ぶ文明の結節点として機能してきたその原動力に、異質なるものとの平和共生を可能にする寛容思想があり、またそれを支える長崎独自の政治・経済システムの存在が指摘された。

さらに長崎において歴史的に形成された寛容思想は、原子爆弾による被災という不幸な出来事に於いても遺憾なく発揮された点に着目した。つまり、毎年長崎では、8 月 9 日の日に「平和へのメッセージ」を発信しているが、ここには敵味方を問わず、共に平和を目指す。この強靭な寛容思想に支えられた平和的共生のメッセージがある。この思想こそ、仏教で言えば「怨親平等」思想であり、キリスト教で言えば「アバペー」に基礎付けられた「長崎文明の共生の思想」の結晶ということができるのではないかとの結論で、鼎談は締め括られた。

講演の様子。向かって右から国際比較文明学会リン会長、同学会マイケル副会長、保坂俊司研究員。

■大会第２日目：シンポジウム「長崎で文明の共生を考える：『交流』と『融合』の歴史と意義」（会場：出島メッセ長崎）

山口 美由紀氏（長崎市出島復元整備室専門官）の講演風景。

大会２日目のプログラムは、シンポジウム開催に先立ち例外的ではあったが、協賛いただいた鈴木史朗長崎市長の挨拶からのスタートとなった。

挨拶に続き、大会実行委員長から今大会のテーマに関して説明があり、吉野浩司先生（鎮西学院大学教授）の司会のもと、シンポジウム「長崎で文明の共生を考える：『交流』と『融合』の歴史と意義」が開催された。

第１発表者：山口 美由紀氏（長崎市出島復元整備室専門官）
「交流と融合の DNA」において山口氏は、「長崎は、その地理的環境から育まれた複雑な歴史、文化を個性とする都市です。これらのひとつひとつが長崎を構成する DNA であり、時には突出し、また時には相互に関連を持ちながら、現在まで息づいています。」と長崎の歴史や文化を総括し、その中で育まれた国際交易都市としての多様性を前提とする共生文化の形成を出島の存在と関連しつつ実証的な資料を用い丁寧に考察された。まさに、長年にわたり出島の発掘調査を主導してこられた知見に富んだ発表であった。

第２発表者：保坂 俊司研究員（中央大学国際情報学部教授／政策文化総合研究所研究員）
「長崎における文明の共存共栄の知恵の現代的意義・・・小さな長崎の大きな知的遺産」において保坂は、「西洋近代的な一元的思考では、評価が低いのであるが、理想と現実の折り

合いを付けつつ、つまり固有性を維持しつつ、普遍性をも共有できる知恵が、ここ長崎には数百年の長きにわたり形成されてきた。その独自な形態は、ある意味長崎共生文明と表現できる」としたうえで、この長崎は「高度な科学力、軍事力などを含む文明力で、他者を圧倒し、殲滅してきた近代科学文明にはない、利害対立者さえ包み込む寛容思想に支えられた、多様な価値を認める共生社会が形成されていたたぐいまれな国際都市であった。この怨親平等の思想に支えられた長崎が培ってきた知恵こそ世界に誇りえる共生の文明といいえるものであり、その積極的な発信こそ、深刻な紛争や対立を抱える現代社会への長崎の義務ではないか」と長崎の共生文明の現代的意義を強調した。

第３発表者：山下 範久氏（立命館大学教授）

「近世のグローバリティと日本型『貿易港』としての長崎」で、山下氏は「日本を比較文明的な視座に置き、①周辺文明としての日本、②イスラームの外部世界としての日本、③帝国としての日本という三つの視角から、近世日本の『交易港』としての長崎について考えてみたい。」として、大航海時代における海洋ネットワークの一地点であった長崎の文明史的意義に関して巨視的な立場から考察された。

各氏による発表を受けて発表者間で意見交換を行った後、さらに会場参加者との質疑応答の時間が設けられ、熱のこもったシンポジウムとなった。

■大会第３日目：公開講座午前の部「長崎学：共生の街で考える」（会場：出島メッセ長崎）

この部会では、地元の研究者による緻密な事例研究の成果が披露された。

第１発表者：斉藤　義朗氏（長崎県文化振興・世界遺産課係長・学芸員）

「長崎の洋式ホテルにおけるアメリカ人歯科医師の巡回診療
—先進歯科診療所が置かれた長崎居留地のホテル」

第２発表者：田中　学氏（長崎市文化財課主事・学芸員）

「近世港湾都市長崎の形成に関する考古学的研究」

第３発表者：島　由季氏（大浦天主堂キリシタン博物館・学芸員）

「潜伏キリシタンのイナッショ（イグナティウス・デ・ヨロラ）崇敬」

第４発表者：長岡 枝里氏（長崎歴史文化博物館・学芸員）

「《聖福八景図詩巻》にみる 17 世紀末の日中文化交流—忘れられたはざまの世代について」

司会：中牧 弘允氏（国立民族学博物館名誉教授）

以上の発表は、地域研究に名指した特徴のある研究テーマであたが、それぞれに長崎における異文明のとの接触とその定着過程を事象的に示したもので、長崎固有のテーマでありながら文明融和、異文明間共生の優れた事例研究であった。

特別企画：リン・ローズ国際比較文明学会（ISCSC）会長挨拶並びにマイケル・アンドレ同副会長による平和思想のレクチャー

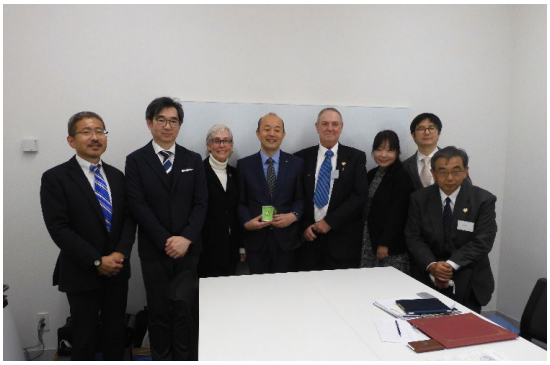
国際比較文明学会会長のリン先生は、日本の比較文明学会との共同研究を一層推し進めることを提案され、満場の喝采を浴びて参加者の賛同を得られた。

また、マイケル副会長は「平和と戦争学」の立場から文明間の共生に関して、長崎での体験を発表され聴衆に感動を呼んだ。（この部会は、個人研究発表の第１部会を兼ねる。）

平和に関する発表を行う国際比較文明学会のマイケル副会長とリン同会長。

今回の大会には、長崎市の広報活動などの協力で多くの市民の皆さんの参加があり、また、本大会への協賛を決定してくださった田上富久前市長も参加された。

特に、吉野浩司先生（鎮西大学教授）並びにゼミ生の皆さんの真心のこもったサポートにより本大会が恙なく終了できたことにも心から感謝申し上げたい。その他市民サークルなど多方面からのご協力を頂いた。なお、大会には白門会の有志も複数参加された。改めて、関係者の皆様に厚く御礼申し上げる。



国際比較文明学会の正副会長、長崎市長を囲んで。